

韓国外国人労働者政策の 韓国的背景

神戸大学大学院国際協力研究科 教授

木村 幹

韓国の外国人労働者政策略史

- 大韓民国建国から1980年代前半
- ○韓国は「移民排出国家」
- ○安全保障上の観点からの厳しい住民管理
- ○外国人政策も管理中心、永住権規定なし
- 1980年代後半から1990年代
- ○急速な経済成長の結果としての所得上昇
- ○大学進学率の向上と3D労働の忌避
- ○外国人労働者の「未登録労働者」としての流入
- ○中国との国交樹立による朝鮮族の登場

産業研修制度から雇用許可制へ

- ○1991年：産業技術研修生制度（海外投資企業対象）
- ○1993年：産業研修制度（中小企業包含）
- 典型的な「政策移転」：モデルは日本の研修生制度（1989年）と技能実習生制度（1993年）
- → 当然の事ながら、日本の制度と同じ問題を抱える
- 「転換点」としてのネパール人労働者籠城事件（1995年1月）



『京郷新聞』 1995年1月14日

韓国の建設会社がサウジアラビアに進出し、労働者たちが家一軒でも経てる金額を稼げれば、という夢を抱いて、多くの人が灼熱の砂漠で汗を流した時代があった。その頃、偶然、香港空港で一群の韓国労働者達に会った事がある。彼らは香港空港から中東に行く飛行機に乗るために待っていた所だった。私はその時の彼らの姿を今も忘れることができない。

新調したかのようなジャンパーは、彼らにあまり似合っているように見えず、初めて旅立つ異国の地に対する恐怖と不安感でに慄く姿が手によるように分かった。

また、偶然、目に入ったある労働者の古びた靴、荒んだ一言に胸が張り裂けるような悲しみと憐憫の感情を感じざるを得なかった。

貧しい親戚に思いがけず会ったようで、気の毒でありまた恥ずかしかった。その妙な気持ちをどう説明すればいいのかすらわからなかった。

私は香港からソウルに戻る飛行機の中でずっと、心を痛め、彼らが元気に暮らし、世界のどこかで立派になった姿を見る事ができれば、と切実に願っていた。そして、彼らが見知らぬ異国の地で、蔑みを受け悲しむことがない事を強く祈っていた。

そして今、私達は、苦難の時期を脱し、外国人労働者を受け入れるまでに韓国は発展した。なのに、人々の心根は何故にこれほど厳しくなったのか。

「どうか殴らないでください」「私たちを獣扱いしないでください」などと書かれたプラカードを持って、人間的な待遇を訴え、明洞聖堂の庭に座って座り込むネパール勤労者たちの姿がテレビ画面に映るのを見て、本当に恥ずかしく、顔を上げる事すらできなかった。

この時点に存在した「自らの過去」としての、外国人労働者問題、への意識

外国人労働者問題を巡る「機会構造」(1)

- 保守勢力：経済的理由から外国人労働者受け入れに積極的
- 他方、民族主義的な観点からの排外主義勢力の影響力は限定的
- 進歩勢力：人権問題の観点から外国人への保護拡大に積極的
- 多くの市民運動団体、宗教団体、そして労働団体が支援
- 保守勢力と進歩勢力の競合と競争
- 保守政権が外国人労働者を導入し（盧泰愚・金泳三）、進歩派政権（盧武鉉）が権利を与える、という歴史的展開
- 労働部と通商産業部の主導権争い（この力関係も政権により異なる）
- 少子高齢化問題に対する強い危機感（失敗事例としての日本の存在）

外国人労働者問題を巡る「機会構造」 (2)

- 日本との大きな違いとしての、労働組合の姿勢
- 幾つかの背景
- ○進歩勢力の「民主化勢力」としてのアイデンティティ
- → 雇用を維持する為に外国人労働者を排斥する論理は働きにくい
- 「労働者の人権保護」は韓国の労働組合においては大きな 이슈
- ○二大労働組合の競争
- → 保守的な韓国労総に対抗する、進歩的な民主労総の活発な活動
- 彼等にとっては、
- 外国人労働者問題は、「韓国社会の民主化の一部」

さて、今後はどうなるか

- 幾つかの変化
- 1) 市民運動エリートの威信失墜
- (「学生運動世代(586世代)」の退場と「長い民主化」の終焉)
- 例：慰安婦問題での正義連の混乱
- 2) 韓国社会における格差問題の深刻化
- とりわけ若年層の雇用問題の深刻化 (→外国人労働者と衝突)
- 3) 韓国社会における「外国人労働者」への親近感の後退
- 文在寅政権下での外国人労働者問題に関わる議論の低調
- → 尹錫悦政権はどうか

外国人労働者に関する記事数推移（京郷・国民・文化・ソウル・中央・ハンギョレ・韓国の各紙合計）

